

岡野彩子著

『ボンヘッファーの人間学』(大阪大学 CO デザインセンター、2020年)

おやさと研究所主任

堀内 みどり Midori Horiuchi

本書は、岡野彩子さん(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招聘研究員)が大阪大学に提出した博士論文に加筆訂正されたものです。彼女はドイツ・ニュルンベルクに留学していた当時、極右による暴力事件が多発し、移民たちがその対象になっていました。街を歩けば「外国人は出て行け!」という殴り書きがあちこちで見掛けられたということです。そういう時代状況の中、岡野さんは「外国人」留学生として暮らしていたわけです。彼女は留学生活を送る中で、「7月20日事件」(ヒトラー暗殺・クーデター計画)を知り、この計画に関わった少なからずの人が、倫理的・宗教的理由から抵抗を行ったことも知りました。その中の一人がディートリヒ・ボンヘッファー(1906~1945、ルター派の神学者・牧師、フロッセンビュルク強制収容所で刑死)で、彼は獄中から非合法的手段で運び出された書簡などを残しました。岡野さんは、次のように述べています。

絶滅に追いやられるユダヤ人の苦難を目の前にして、牧師でありながら最高支配者殺しに加担する決意に至るまでにはどのような思索がなされたのでしょうか。とくに私の心に掛かったのは、彼が獄中で綴った書簡に現れる「キリスト者であることは、ただ人間であることだ」という言葉でした。ナチス・ドイツという国家の枠組みを超えて行為にいたったこの人物にとって、「ただ人間であること」とはいかなることだったのでしょうか。その言葉の意味を知りたい一心で、私はこのテーマに取り組むことを決めました。

こうして、岡野さんはボンヘッファーの言う「ただ人間であること」を知るための研究に取り組み、そして、私たちは本書を通して、その成果を知ることができます。

本書の「はじめに」では、ボンヘッファーの生涯における三時期区分と時代背景が紹介され、彼の39年間とその時代について述べられています。さらに、ボンヘッファー研究史について言及。簡潔ではありながら、丁寧な解説となっています。そうして、読者は、「ただ人間であること」を考えていくための準備を整えることができます。

序章において、「本書の目的・方法・構成」が示されます。その中で、岡野さんは「本書の主たる目的は、ボンヘッファーの思想を一時代精神の先駆者という先入観からも、また教義学的な枠からも解き放ち、人間学的な視点から再解釈することにあります。彼の人間学の特質を取り出すだけでなく、倫理的・他者論的関心から、その人間学が持つ今日的意義を明らかにすることを目指しています。」と述べています。そして、彼の「私は何ものか」という問いを引用します。この問いを詩として、独房の中で書き記し、「私は本当に、人びとがいうような者だろうか。／それとも、私自身が知っているだけの者に過ぎないのだろうか。」「私は何ものか。後者か、それとも前者か。／今日は後者で、明日は前者か。／あるいは同時にその両方か。」と繰り返し問い続けます。これについて、岡野さんは「そこに自己不統一という経験があったからでしょう。それは彼にとって、神という根源から離反した墮罪後の人間が巻き込まれた<分裂>状態にあることを意味しました。彼の人間学は、この状態を克服し、いかに統一された<全体的な生>を生きるかという問いと、つねに関わっています。」と

述べています。こうした問題意識を根底に、本書は構成されています。

本書は、大きく3章から成り、それぞれを独立した論文として読み進めることも可能ですが、序章から順に読むことによって、「ボンヘッファーの人間学」を今日において明らかにしたいという著者の意図がはっきりしてき

ます。キリスト者であるボンヘッファーの「自己」なるものへの問いを出発点とし、その問いが内含する人間存在そのものを現代に生きる人々に問いかけているように思われました。「人間学」としてまとめあげることで、神(絶対者、超越した者、大いなる者)と人間との関係、救済の内実、良心と規範・法に関わるテーマがダイナミックに問われていきます。これらの問いを受けて、では、今日の時代において「人間学」はどう私たちに関わっているのかが議論されます。そして「ただ人間であること」が最後に論じられるのです。

本書の構成は以下の通りです。

- はじめに
- 序章
- 第1章 限界・境界(Grenze)から見るボンヘッファーの人間学
 - はじめに
 - 第1節 限界・境界とは何であるか
 - 第2節 限界からの人間の自己理解
 - 第3節 限界・境界を持つものとしての人間
 - むすび
- 第2章 ボンヘッファーの人間学における良心論
 - はじめに
 - 第1節 良心の語義的考察
 - 第2節 ボンヘッファーの良心概念の歴史的概観
 - 第3節 法と良心
 - むすび
- 第3章 ボンヘッファーの<成人した世界>における人間学
 - はじめに
 - 第1節 世俗化の議論とボンヘッファー
 - 第2節 ボンヘッファーの<成人した世界>
 - 第3節 ボンヘッファーの宗教批判
 - 第4節 ただ人間であること
 - むすび
- あとがき
- 文献一覧

